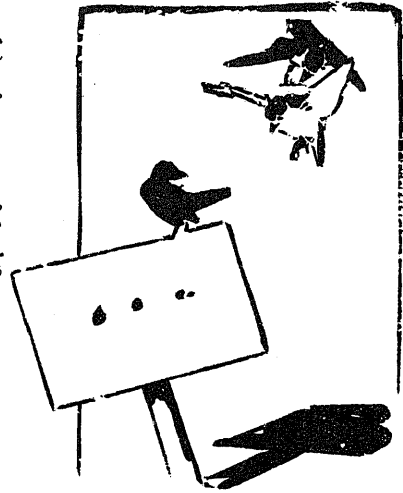


石屋の槌造



むかし〜まづある處に石屋の槌造といふ男が居りました。石屋ですから、毎日〜山へ行つては石を割つて賣り歩くのが商賣で、貧乏ではありませんが、正直によく動いて、僅かのお金を儲けては、樂しく其日を送つて居りました。

所が、この槌造の石を切り出す山には、一人の神様が住んで居て、人の云ふ事は何でも聞いて下さ

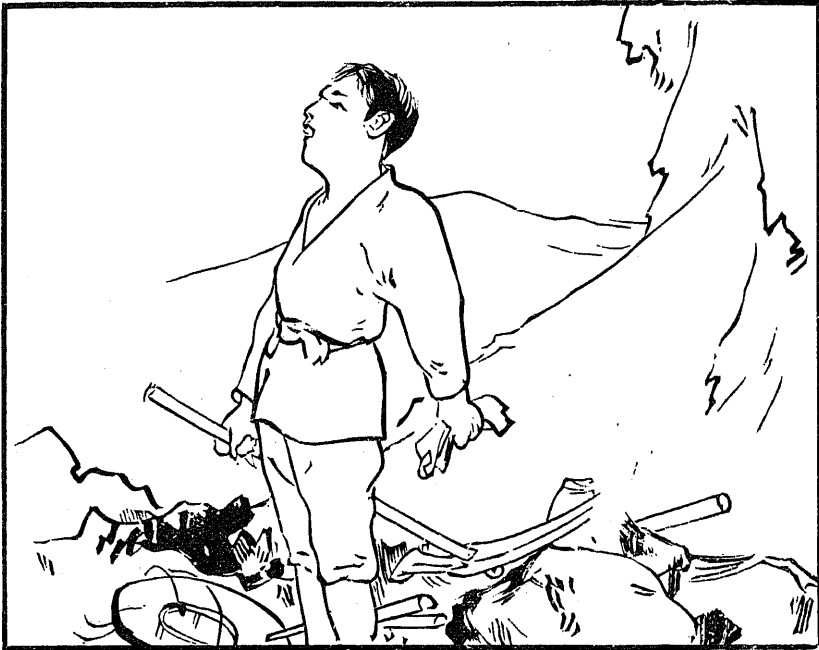
るといふ昔からの言傳があります。然し、槌造は、そんな馬鹿なことがあるものかといつて、決して眞實にはして居ませんでした。

所で、或日のこと、槌造は常日もの様に、この山から石を切り出して、それを或金持のお家へ持つて行きました。行つて見ますと、その金持のお家といふのは非常な立派なもので、槌造などが、とても今迄夢にも見た事もない位でした。それを見ながら、槌造は、急に自分の今の家業がいやで〜堪らなくなつて来て、山へ歸つて来てから、

「あゝあ、いやだ〜こんな骨の折れる仕事は、もう〜とんとといやになつて仕舞つた、どうかして、今日行つた様な、あんな立派なお金持になつて見たいものだ」

と、獨り言をいつて居ますと、不思議にも、山の

中から聲が聞こえて、
 「お前の望を叶へてやら
 う、今からお前はお金持
 になる事が出来る」
 樋造は不思議に思つて、
 其邊を見廻はして見まし
 たが、一向人影も見えま
 せん、で、樋造は、大方、
 これは自分の氣の故で、
 そう聞こえたものだらう
 と思つて、「何だ、馬鹿馬
 鹿しい」と獨り言をいひ
 ながら、何だか、今日は
 もう仕事するのも厭にな
 つちやつたといふので、



ぼつゝ道具を片付け
 て、肩にひっかけながら、
 家へ戻つて参りました。
 所が、家へ戻つてから驚
 いた、といふのは、もと
 自分の住んで居た汚ない
 小家は、何時の間にか、
 夫は立派なお邸にな
 つて居る、家の具合から、
 道具などの立派さから、
 お座敷やお庭の風から、
 丁度さつきからなりたい
 と思つて居たお金持
 の住居そつくり其儘にな
 つてあります。喜ぶまい

ことか、樋造はこれを見て、丸で夢の様な心持になつて仕舞ひましたが、そんなり、今迄の、貧乏所帯の暮しであつたことはすつかり忘れて仕舞ひました。

所が、ある夏のこと、樋造は馬車に乗つて往來を行つて居りましたが、頭からお日さんの熱で照り附けられて堪らない程暑い、水を徹してもくさ乾いて仕舞ふ、樋造は、それを見て、

「はて、お日さんの力といふものは、豪いもんだな、巳も一度お日さんになつて見たいもんじや」といつて居ますと、何處からとなく又山の神様の聲が聞こえて、

「それじや、お日さんにしてやらう」

といふかと思ふと、樋造は忽ちお日さんになつて仕舞ひました。

そこで、樋造は天に居て、しきりにそいらを照らし渡つて獨りで威張つて居りましたが、どうも毎日同じ様なこと許りで積らないなと思つて来た矢先に、真黒い雲が一塊やつて来て、今までぴかりくと照つて居たお日さんを隠して仕舞ひました。お日さんは

「あゝ詰らんく、どうも雲の方がお日さんよりは、強い様だわい、巳も一番今度は雲になりたいもんじや」

といひますと、又山の神さまの聲がして、

「夫では雲にしてやらう」

といふかと思ふと、樋造は又雲になつて仕舞ひました。そして、地面とお日さんとの中に立つて、毎日しきりと雨を降らして居りますと、さあ大變、そいらの川々から大水が出て、家だの橋だのは、ど

んく、壊はれて流されます、槌造は得意になつて
「どうだい、雲の力は豪いもんだらう」

といつて、ひよいと見渡すと、何もかも壊れて流
れて行く中に、吃として威張つて立つてるものは
岩でした。夫を見て槌造は

「はてな、これで見ると已よりも岩の方がよほど
力強いようじや、今度は一つ岩になりたいものじ
や」

といひますと、其願が叶つて槌造は雲から岩に變
りました。こんどこそは大丈夫、幾ら日か照らう
が、雨が降らうが、已をぶち壊はすものは、天下
が所も居ないわいと思つて、大威張りで立つて居
ました。

んに、ある日、自分の脚下で、トツテン、トツテ
ンと變な音がする、何か知らんと思つて、俯いて

見ると、一人の石屋が、大きな唐瓦で以て、しき
りと岩をうちわつて居る。トツテンと音のする毎
に、さしも大きな岩の破片が、がわらくくくとづ
れ落ちる、それを見て、槌造は

「こりや叶はん岩よりか、わんな人間の方が強い
と見えるわい、己も今度は、人間になりたいな」
といふて、又山の神さまの聲がして

「じや、も一度人間になるがよい」

といふかと思ふと、槌造は又元の石屋の槌造に歸
りました。そして、夫からは、毎日く汗水になつ
て石を切り出しに行きました、もう決してく
何になりたいたいといふことも申しませんでしたか
ら、山の神さまのお聲も聞こえないで、貧乏なが
らも其日くを可白く暮らして行きましたとさ

めでたし〜。